

「昴……!!」

苦し紛れ、うしろに倒れながらレフトに高々と上げた  
トスを見上げ、昴がぐつと膝をためる。

——ああ、いけん!

あいつの足がコートを離れるより前に、俺にはもうわか  
かってしまった。トスの位置が悪すぎる。昴にもきつと  
わかったはずだ。スローモーションみたいな視界の中、  
あいつが歯を食いしばるのが見えた。

昴は、俺らのエースは、それでも高々と跳んだ。汗が  
散る。何度も何度もスパイクを打って疲れ切ってるはず  
の昴は、それでも今日一番くらいの高さに跳んで、振り  
かぶった右手を、俺のトスしたボールに叩きつけた。

ダン——!!

ドンピシャでついてた相手高の二枚ブロックが、昴の  
スパイクをシャットアウトする。ブロックフオロも間  
に合わないスピードで、ボールがネットの真下に叩きつ  
けられた。

ピィ——。

ホイッスルが鳴る。

セットカウント三対一。

俺たちの夏が終わった音だった。

\* \* \*

整列して審判に礼をして、相手高の選手と握手して、  
ボールや用具を片付け、更衣室で着替えて、大会会場の  
入り口に集合。そういういつもの流れを、どうやってこ  
なしてたか記憶にない。気がついたら顧問が解散と言っ  
て、用具担いだ一年らを引率して歩いていくとこだった。  
あんまり熱血じゃないけど短くていいコメントくれる顧  
問なのに、さっきまでなにを言ってたのか全然記憶にな  
い。なんか申し訳なくなりながらぼーっと見送ってるど  
んと、と背中を叩かれた。

「キヨ」

斜め上を振り返る。

昴が笑っていた。

「帰ろうや」

昴がいつもの足取りで、すたすたと歩く。

俺はその後ろをのろのろと追いかけた。

距離が三メートルくらい開いたところ、昴が振り返った。

待ってくれてるのがわかってても、俺は足を速められな

かった。引きずるような足取りで前に進む。昴に近づく

につれ顔を上げてられなくなった。自分のスニーカーの

つま先だけを見つめる。

俺のコンバースが隣に追いつくまで、昴のでっかいニ

ューバランスは動かないままだった。

「キヨ」

昴が俺を呼ぶ。

いつもの声。

なんにも怒ってない声。

それを聞いて俺の脳みそのほうが沸騰した。

「……なんで怒らんの？」

「え？」

「なんで怒らんのじゃ！俺のトスが悪かったんじやろ

うが！あんなつまらんとスあげてからに言やあえ

えじやろ!!」

「ちよ、キヨ、逆ギレかいや」

「おまえがキレンけえじゃ！」

昴の制服の胸ぐらをひつつかむ。

「ちいたあ怒れや！俺らの夏、俺のせいで終わったん

やぞ！」

唾を飛ばす勢いで怒鳴ったら、昴が俺の両手をつかん

で、無理矢理引きはがした。

エースの腕力でやられて、あっけなく俺の指が昴のシ

ヤツから離れる。

「キヨのせいじゃなかるーが」

ぎり、とつかまれたままの手がきしんだ。

試合が終わってから初めてまともに見た気がする昴の

顔が、目が、ぐらぐら煮えてることに初めて気付く。

「よう決めんかったんは、俺じゃ」

——ああ、こいつも怒っとった。

「キヨがせつかくトスあげてくれとったんに」

ぐうっと、昴の口元が歪む。

「決めれんかった。——おれ、エースじゃったのに」

肩に、昴の額が乗った。

ひいっと、喉を震わせて息を吸う音。

「ごめんなあ」

「……あほ」

手はまだ鼻につかまれたままだったので、頭をきちんと鼻の頭にぶつけた。

「俺のセリフじゃーや。……すまんの」

謝ったら、鼻はまた、ひっと喉を鳴らす。

——ガキか、でっかい図体しよってからに。

校門出てすぐのところ、ごつい高校男子が二人でこんなんやって、確実にキモいと思う。

でも、今日だけはきつと許されるだろう。

今も体育館の中で、たくさんの夏が終わりに続けている。

\* \* \*

俺らはあるふれた高校生で、普通にバレー部やって、普通に練習して、普通にがんばって、普通に負けた。

マンガみたいな血反吐はく特訓もやらなかったし、天才オプレイヤーとかもないし、奇跡も起きなかった。

全国のトップに行くような奴らには、たぶんそういうマンガみたいななががあるだろう。

俺らなんか、インターハイ優勝はおろか、県代表すらまともな目標として語ったことがない、山ほどある普通のバレー部のひとつだ。

部活だけに青春かけてられんのんじゃ、そんなことを言っで街で遊んだり、学校行事を楽しんだりした。

あの時間全部バレーに掛けていたら、今日の結果はきつと違っていたのだろう。負けて悔しいなんて、俺らに言う資格はないのかもしれない。

けど。

「悔しいのお……」

俺の肩のところで、鼻が呟いたのが、すんと胸に落ちてきた。

キヨは考えすぎなんよと、いつも笑うやつだ。

セッターが考えんでどうするんやバカエースと、俺はいつも言い返してたけど。

そっか、

「……おう」

俺はこつくりと頷く。

「悔しいわ」

もう一度、ごちんと頭を鼻にぶつけた。

鼻は痛い痛いと言いつつ泣きの声を上げる。

俺は鼻を笑うふりをして、肩を震わせた。

——悔しいって、俺も言うてもええんじや。

鼻にはかなわんわと、入学以来何度目かも忘れたフレ  
ーズを胸の内で呟いた。

\* \* \*

今度は同じ速度で、駅まで歩く。

切符を買って、改札を抜けた。

俺は上り。鼻は下りで反対のホームに行くから、ここ  
から別々だ。

朝練ももうないから、次に会うのはたぶん、明日の放  
課後。

「……じゃあの」

「おー」

歩いてるあいだに正気に戻って気恥ずかしくなってる、  
なんだか鼻の顔が見にくい。

目を逸らしぎみに手を振って、階段を上ってく鼻のニ  
ューバランスを眺めた。

ほかの奴らは前の電車に乗ったらしく、同じ制服は周  
囲にいない。ひとりになつたらやることなく、なん  
となく携帯電話を取り出した。

——あー、アラーム切つとかんと。

カンカンと耳障りな踏切の音が聞こえてくる。たしか  
下りのが先に来るから、これは鼻の乗る奴だ。

「キヨ——!!」

いきなりの大声に俺は目を剥いた。

——何やりよんじやアイツは!?

反対のホームで、鼻がぶんぶんと手を振っている。

ただでさえでかくて目立つのに、更に目立ちまくりだ。

日曜の昼すぎであまり人が居ないのがあるがたい。

「ありがとおなー! 最後、トス、あげてくれてー!

決めれんでごめんの——!!」

でっかい声のまんま、鼻は続ける。

「おれ、キヨとバレーできて楽しかったでー！ ホンマ、ありがとおなあー!!」

ああくそ、恥つずかしい奴……！

——つきあいきれるかあや。

俺はそっぽを向いて、手だけキヨに振る。

ガタタン、ガタタン、下り電車が入ってきてきてあいつの  
声と姿を消して、心底ほっとした。

……と思ったら、電車に乗り込んだキヨがこっち側の  
ドアにべたつと片手をついて、もう片手でさっきの続き  
のように手を振っている。

俺は短い髪をぐしゃぐしゃとかきむしって、

「恥ずいんじゃ！ あほが!!」

怒鳴って、中指を立ててやった。

それを見て、なにがおかしいんだか腹を抱えて笑い出  
した昴を乗せて、下り電車は去って行った。

……はっと気付けば、俺はさっきの昴と同じくらいか  
それ以上に周囲の視線を集めていた。あまり人が居ない  
のが、まじで心の底からありがたいっつららない。

「くっそ……明日殴る」

いたたまれなくなって俺はホームにしゃがみ込んだ。  
ありがとう、とか。

——こっちのセリフじゃあや。一方的に恥ずいこと言  
い捨てて逃げよってからに。

やっぱり明日殴る、と俺は心に決める。

踏切が上り電車の接近を知らせて、カンカンとまた鳴  
りだしていた。